DataCore™ SOFTWARE The Storage Hypervisor Company

株式会社ダイワパックス
仮想化でデータバックアップ
端末のレスポンスを大幅に改善
併せてＢＣＭ実現で事業の競争力を強化

株式会社ダイワパックス DAIWA PAX CO.,LTD.

「包装の未来をクリエートする」というキャッチコピーが示すように、食品や医薬品、電子部品の包装資材の製造販売が主業務だ。取引先は大手・中堅の食品・医薬品メーカー、生鮮食品の量販店など数千件。包装資材は食品によって異なり、錠剤のパッケージには細心の品質が必須となっている。情報システムは多取引先・多品種かつ臨機応変の納期対応が求められる。しかし巨額のコストはかけられない。「ハードウェア・デッドロックからの脱出は長年のテーマでした」と業務部長の岡村敏彦氏はいう。
その決定的な解決策がSANsymphony™-Vによるストレージの仮想化だった。
岡村氏に話を聞いた。。

「西暦2000年（Y2K）問題に取り組んだのが仮想化への第一歩でした。オフコンからCSS（クライアント・サーバ・システム）、Citrix XenServer/XenServerの導入、そしてXenDesktop+SANsymphony™-V。ホップ、ステップ。ジャンプです」――岡村氏は振り返る。
その間にデータセンターへのアウトソーシングという選択肢はなかったのですか？　と質問すると、「ビジネスのコアであるＩＴは自社開発、自社運営が当社のポリシー」という答えが返ってきた。

Y2Kを乗り切ったことを確認してから取り組んだのが「OSやアプリケーションのバージョンアップごとにかかるコストと手間をどうすれば圧縮できるか」だった。端末（PC）ごとにアプリケーションをインストールしている限り、現場に赴いてサポートをしなければならない。2009年のCitrix XenApp導入後、基幹業務アプリの集中管理は実現していたが、端末ハードウェアやOSレベルの課題には対応できなかった。

「それだけでなく、データをどう管理するか、という問題もありました。ストレージのトラブルでデータを喪失したら、当社のビジネスが立ち行かなくなります。インターネットの利活用が広がると、データ量が爆発的に増加するのは目に見えていました。そのたびに高価なストレージを増設するのは、当社のような規模（従業員73人、年商85億円：2011年度実績）の会社にとっては大きな負担です」

コンピュータ・メーカから出てきたのは、ハードウェアの拡張で対応する提案が中心だった。それではメーカ・デッドロックからいつまでも抜け出せない。「システム開発でお付き合いがあったSIer（株式会社エイコー）の方に相談したら、仮想化という手法がありますよ、と」。
最初に提案されたのはネットワークのCitrix XenServerとXenDesktopだった。サーバーを仮想化し、端末のPCをシンクライアント（仮想デスクトップ）化すればリプレースのコストは発生しない。OSはブート用として使い、Officeツールはそのまま利用すればいいので、それだけでＩＴ投資が節約できる。データやアプリケーションはサーバー側でアップデートするだけで済む。

Key Point

導入のきっかけ
- データの増加に対する対策
- データ保全の必要性
- メーカーのデッドロックの回避
- 仮想化によるIT投資の削減

導入の効果
- データをリアルタイムで二重化
- トータルコストの削減
- I/Oレスポンスの高速化
- 事業継続の実現

導入製品
- SANsymphony™-V

主なソリューション
- XenServer / XenDesktopの共有ストレージ対策
- Thin Provisioning
- Sync Mirroring (HA)
- ストレージ管理の一元化
- コストの大幅な削減

(株) ダイワパックス本社＝大阪府東大阪市

「1998年からホップ、ステップ、ジャンプで仮想化を実現できました」と岡村氏は語る。

岡村氏は次期システムに必要な情報を集めていたので、仮想化の提案は魅力的だった。「CPUを仮想化するのは分かります。しかし気になったのは、データのバックアップ、つまりストレージも仮想化できないか、ということでした」。バックアップをバッチ方式で行うと予想以上の時間がかかる。しかも“いま”のデータとギャップが出てしまう。東京と大阪で同期させる遠隔の二重化ではサポートができない。

「部下に“バックアップが終わるまで帰るな、休むな”なんて言いたくないじゃないですか」。東大阪の本社内で大きな負荷なく、確実に、かつローコストで、さらにメーカー・デッドロックから解放されたい。「大企業ならともかく、当社のような規模ではとんでもなく無茶な要望」と思っていた。ところが、SANsymphony™-Vならスモールスタートが可能だということが分かった。しかもリアルタイムのデータデュプリケーションが可能になる。バックアップに神経をとがらせる必要がなくなる。これが決め手になった。

Citrix XenDesktop/XenServerとSANsymphony™-VによるPCの集中管理とシステムの二重化を決断したのは2011年の秋だった。Y2K対応から3世代目のレベルアップで、同社は完全な仮想化を採択したことになる。SANsymphony™-Vによってメーカー・デッドロックの懸念やバックアップに対する不安もなくなった。「初期費用はそれなりにかかりましたが、ライフサイクルコストは大幅に低減します。中期的に見れば２割から３割のコストダウンじゃないでしょうか」

同社がユニークなのは旧来のCSS型と仮想化システムを並行運用していることだ。「取引先が要求するシビアなシステム品質に対応するため、システム全体も二重化しているんです。どちらかがダウンしても一方が動いていればBCM（Business Continuity Management）が機能します」。現在はCSS型と並行運用しているので、「レスポンスの違いがよく比較できる」という。「仮想デスクトップは驚くほどサクサク動きます」。これまでの位置づけは“情報処理”だった。「それが、ＩＴを使えばもっといろんなことができるというマインドが生まれたんです」。中小規模の企業だからこそできるＩＴ経営のモデルケースといっていい。

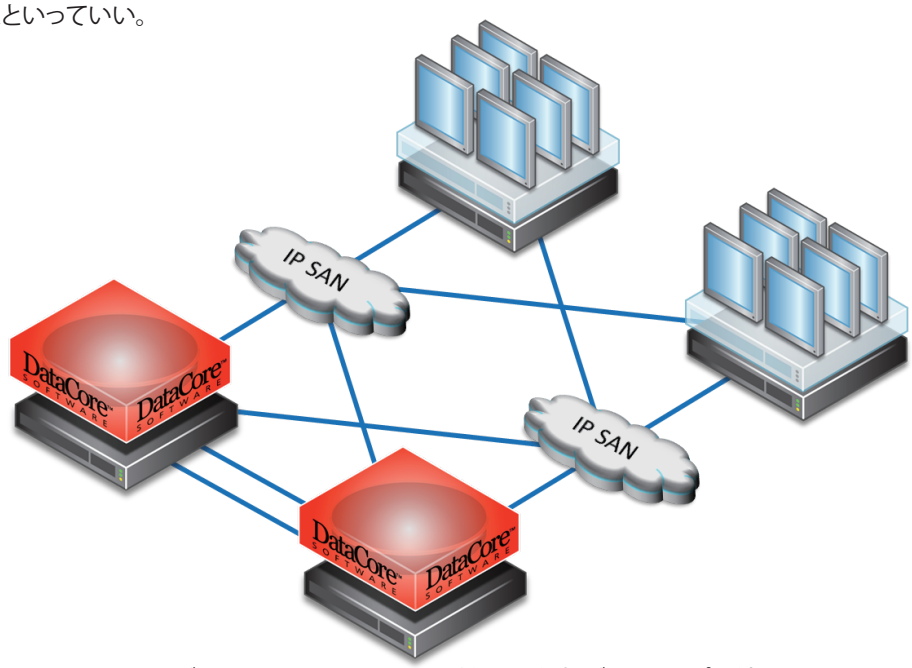

図:データをリアルタイムで二重化した仮想デスクトップ環境

関連企業情報

エンドユーザ
株式会社ダイワパックス
http://www.daiwapax.co.jp/

構築パートナー
株式会社エイコー
http://www.eicoh.com/

201208

より詳細な情報は、**japan.datacore.com** もしくはメール **datacore-japan-sales@datecore.com** まで

データコア・ソフトウェア株式会社　〒101-0021 東京都千代田区外神田6-14-7 秋葉原トーセイビル5F

© 2011-2012 by DataCore Software Corporation, DataCore Software K.K. All Rights Reserved. DataCore、DataCoreロゴ、およびSANsymphonyは DataCore Software Corporationの商標です。他の製品名、サービス名および社名は、それぞれの会社の商標です。